

輯安 444 220
古代朝鮮 44
三〇(卷)五-26 因

玄菟郡 213
三〇(卷)五-213 308
2143 308 213 上注(=)

2139-1/2 2139-1/2
2153-1/3 2153-1/3

幽州 小林 353 河北
古代朝鮮 47
利史 小林 140



2443 851
混迷 小林 576

第三十二章 東海の島の奇妙な習俗

朝鮮半島の混迷の歴史

倭国の女王日御子が夫君梯儻を廻り憂え

711 年の年、正始五年(二四四)、

国の幽州刺史(河北省地域)母丘侯は、高句麗を攻

古代朝鮮 47

撃してその王都丸都城をおとし入れた。『古代

朝鮮』井上秀雄、日本放送出版協会、四七一

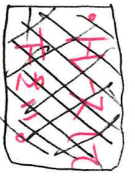
四八頁参照)

討を行ない、高句麗王がいに買溝へ逃げ

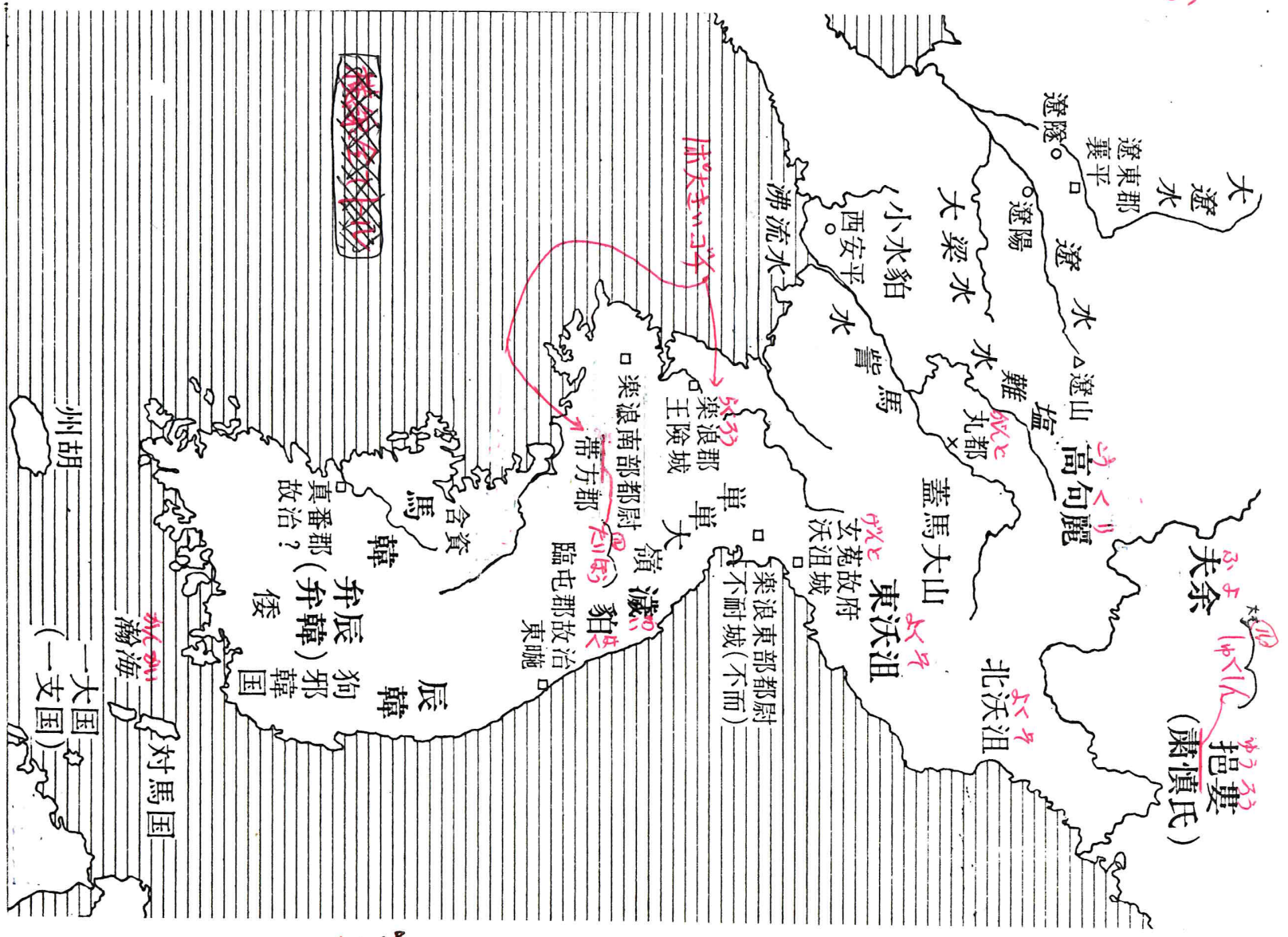
た時、母丘侯は、玄菟郡太守王頎(字は孔碩)に

東萊の人正始八年に帯方郡太守となるに

右の金剛に、
大主と掲載
下211。



2,139^P - 2/2



416^P
遼東郡都尉
單于大領古八門對其者領引

1409 第314圖 東夷伝地圖

1309

『三國志』II、世界古典文学全集、筑摩書房、昭和57年2月20日発行、
296頁参照。

2140
三国志I-117

小林980
三国志I-301左下
邑落 村 322

三九頁へ東夷伝地図。三国

母丘俊伝 参照

第314図へ東夷伝地図

一かーなから高句麗は、この年・正始六年

(二四五)、なおも勢力を盛り返し、領

東(嶺東)の歳を支配下に置いて、魏国と対

峙した。そこで、樂浪郡太守の劉茂と、帯方

郡太守の弓遵とは、軍をおこして、これを攻め

た。不耐(歳)侯らは配下の邑落を挙げて降

服した。(「三国志」歳)

またその翌年、正始七年(二四六)の春二

月、母丘俊は高句麗を討伐し、夏五月には、

歳を討伐して、こちらを撃破した。(「三国志

齊王紀、七年条)

*

丁度その頃、南朝鮮の韓族

1169' 1197' 1199' 1201' 2,141
 1203-1/4
 1204
 1206P 1208P 3/2
 1217P 3/2

239年の前年
 (1197', 1201P)
 1206P 1208P 3/2
 1217P 3/2

と楽浪・帯方二郡との関係も極めて陰悪なものとなっていた。

先に述べたように、楽浪・帯方二郡の地域が魏の支配下に入っていたのは、二三八年のことであつた。

第十五章へ魏国へ「楽浪」「帯方」を奪回するの項において既述

この二郡が復活した当初の頃、韓族の小国を歓迎したものの、魏の政策と、韓族との利害は対立

した。魏の政策的な衝突へと発展していった。

中国の文献によると、およそ、次のような推移があつたようである。

楽浪郡は、前漢代から韓諸国を支配していた。

後漢（二五〇）末の一八四年に

黄巾の乱が勃発し、ついに、支配権が事実上放棄された。

独自の力で楽浪郡を復興した公孫度は、二

五年ころ、楽浪郡の屯有県（現在の黄海北

560.4.14
410.8.23
②162^P ②090^P ②161^P

②2090^P ②161^P 2.142^P

15^Pほど後
②2161^P ②303^F ②308^F
三〇五(茶)Ⅱ-303^P(308^P)
下利2行

卑彌呼が魏国に朝貢した三九九年の(前年)

道黄州方面以南を帯方郡として、南朝鮮の韓族を支配した。(第十五章において既述)

二郡は魏の支配下に入った。(既述)

韓を分劃して、楽浪郡に併合させようとした。

の臣智(王)が怒り出し、人々の怒りをあお

攻撃をかけた。

この戦いは激烈を極めた。

連と楽浪郡太守の劉茂とが兵を起し、征討を行なっている最中、弓連が戦死するほどであった。

た。(「三国志」韓伝参照)

なお、弓連は、正始七年(二四六)または正始八年(二四七)に戦死したようである。

(「女王国の出現」小林行雄、文英堂、二九九頁参照)

陽へぼしたという。(第三十一章へ帯方へ、そして洛陽へぼしたという。(既述))

こと

後漢書 59' 55'

2,144^P

④ 三〇五正気摩(茶) 300^ナ こと
原文(赤)(2) 583^P

曹魏の元二四・二五で計算すると七・三六(ト)

衣(衣服)の袖・襟・衽などを除いた身体を

両袖は三丈ものは中国人の着物と変わりませんが

船が波にながされ海岸に漂い着いたことがあ

りまゝ死にまゐた

のあゝ人間がいて、生けどりにさし込まれた

しかー話しかけても言葉が通ぜず、食物を取

らぬまま死にまゐた

こうした者たちのいる場所は、みな沃沮

るのである。(「三国志」東沃沮伝 参照)

(朝鮮半島基部東岸)の東方の大海の中にあ

る。

これらのは、一見、奇妙だ

しかし、もしかしたら、次のような意味

あつたかも知れない。

船に乗っていて暴風にあい、漂着したとこ

ろは、倭国の東の「拘奴国」であつ

たろうか。(後漢書倭伝 参照)

これより少しばかり後のことながら、

こと

→ 次頁から

こと

親と連 46
後漢書 57
漢書 95 2.146^P

① 1705^{P-1/2}

「三〇六」原注

頭字の記号は
新編の記号

紀上589^P
正始6年(245)

② II-583^{P左下}
天つ改訂

（一五七）頃（ころ）に新羅国（しんらか）から渡来（とらい）し、非常（ひじょう）の人
として王（おう）となつた延鳥郎（えんとうら）の子孫（しよそ）など、一（ひと）少（せう）数（すう）
なから、この当時（とうじ）の朝鮮語（しんせんご）を喋（しゃ）る者（もの）がその数（かず）
方（た）のある島（しま）に住（す）んでゐたので、聞（き）き知（し）ること
が出来（でき）たのだから、（第一章）延鳥郎（えんとうら）の項（こう）参照（さうしよ）
などと、興味（きうみ）深く思（おも）ひ入（い）る。
又（また）言（い）ひ、有一（ある）國（こく）、亦（また）在（あ）る海中（かいちゆう）、純（じゆん）女（にょ）無（な）男（なん）
海（かい）のかなたに、女（にょ）ばかりで男（なん）のいな、國（こく）
かある、
というの（この）は、
（わ）ゆる日（ひ）邪馬台国（やまたいこく）に
（と）についで、の誇張（こしょう）した話（はなし）なのであろう。
先（せん）述（じゆつ）のよう（よう）に、日（ひ）後漢書（ごかんしよ）倭（わ）伝（でん）に、日（ひ）魏志（ぎし）倭（わ）
人（にん）伝（でん）に、日（ひ）晋書（しんしよ）に、卷（くわん）九（きゅう）七（しち）。四夷（しよゐ）伝（でん）。倭（わ）人（にん）の条（じょう）
日（ひ）梁書（りやうしよ）に、卷（くわん）五（ご）四（し）。諸夷（しよゐ）伝（でん）。倭（わ）の条（じょう）
日（ひ）隋書（ずいしよ）倭（わ）
国（こく）伝（でん）に、な（な）どを（を）み（み）ると、
（邪馬台国）に女（にょ）多（おほ）く、男（なん）少（せう）し
と（と）い（い）つた（こと）が記（き）さ（れ）て（い）る。（第二十五章）
へ女人国（にょなんこく）の項（こう）に（に）お（い）て既（すで）述（じゆつ）

こと

こと

2144 1/2 一見奇跡 ちのみじ 乳呑見(乳飲見) 元1431 元1905
 1591 57 三日月(四) 583 左下 2,147
 161 → 76

小林 376 三日月(原文Ⅱ) 583
 2144 1/2 4行

前頁

大カンマ 708

又説傳一布衣從海中浮出 身如中國人衣
 其兩袖長三丈 奇怪である

この記述は、非常に興味深い。

① 想像でしかないが、

倭国の貴人たちの祖先は、実は、中国人で

あった。

そこで、倭国の支配層の女たちの着物の袖

は、まさしく中国人の衣と同様であった。

しかし、兩袖だけが異常に長く、長さ三丈

もあった。

というのであろう。

② さて、兩袖のように見えただものは、

倭国の女人達が肩にかけて用いる肩巾

(領巾) だったのだらう。

と思われ。 * 但し、長さ三丈は多少大袈裟に表現されてゐるのかも

難破船には、項の所にもう一つ顔のある

人間がいて、食物をとらずに死んだ

とは、通常の常識では理解しにくい。

だが、あるいは、

難破船に乗っていた女は、背中中に赤子を

負っていた。その乳呑見は食物をとらずに

死んでしまった。

女は話しかけても言葉が全く通じず

11.1.1.10
H10.8.25

SFL 2, 148^p 世界のおんぶに事情

「埴輪」カラーアラス 82^p SFL 2, 148^p - 1/4

マヨカ
モウカ
モウカ
モウカ

と、いう意味。なのかも知れない。

・栃木県真岡市京泉の鶏塚古墳から出土した

埴輪。子供を背負う女は、壺を頭の上に乗

せ、背中に子供を背負った庶民層の子守りの

女を表現しているとい、女の子の項へ首

のうしろの部分へあたり、横向きの子供の

顔がある。埴輪に伊達宗泰、保育社、ハ

二頁参照。写真版へ子供を背負う女

・日本列島に住んだ土着民達は、大昔から、

子供を背負って子守りして来たのであろう。

・そして、

へこうした「子供を背に負う」という風俗が

大陸の人々の目に奇妙に映った

と想像される。

＊なお、こどもの城小児保健部長で東京家政

大教授の荏野悟郎氏は、

「日本古来のおんぶは、世界的にみても、

非常に珍しい

と、いう。へ「朝日新聞」昭和十三年三月二十六

日付へ世界のおんぶ、だつて事情（参照）

＊

・カ-
 ・質の右半
 (おは左半)
 上段は左
 大を掘下
 さい。

2.148⁹ - 2/4



6世紀 栃木県真岡市鷲塚古墳出土 高さ41.5cm 東京国立博物館

1309 1409
 『埴輪』 小林行雄、平凡社、昭和49年8月5日発行、12番参照。
 世お 子供を背負う女 361 写真図版

(1)

三国志(2)-295^上
由213^上 2/2

2,148^上 - 3/4

350^上 末

公孫淵

原文2-580^上
漢書593^上

原文(2)-579^上 下末行へ

三国志(2) II-295^上 上7行

千工7^上 414.9.12 (5) 三国志(2)
II-294^上

また「三国志」鳥丸鮮卑東表伝第三十
「東表伝」の冒頭には、次のように記されて
いる。
「景初年間(二二七-二三九)、大規模な
遠征の軍を動かして、公孫淵を誅殺した。
又、潜かに兵を船で運んで海を渡り、楽浪
と帯方の郡を攻め取った。
これ以後、東海のかなたの地域の騒ぎもい
すまり、東表の民たちは中国の支配下に入っ
てその命令に従うようになった。
のちに高句麗がやむくと、ふたたび軍の一
部を分けて討伐におもむかせた。その軍は、
極遠の地をきわめ、烏丸、骨都をこえ、沃沮
を通り、肅慎の居住地にまで到達した。
その大海を臨む地にまで到達した。
「ハヤニに住む」老人の言葉によれば、不思議
な願つきの人種が「さらに東方の」太陽が
昇る所の近くにいて、とのことであつた。
という。「三国志」II世界古典文学全集、筑
摩書房、二九五頁参照)

もつとも、日本列島のどの地域に住んでいる

三国志(2)
II-286^上

阿キ

H30(2018)5.29(火)~5.31(4回)
 H31(2019)1.20(日)~1.21(3回)
 令和元(2019)6.26(火)~6.26(3回)
 令和2(2020)10.18(日)~10.19(4回)

2.148^P-4/4

1469^P-3/6

10/19
 下10/19

人種についで、記述なのは、全く分らない。
 (1) 肅慎からみて東方の太陽が昇る所(現在の北陸地方一帯に住んでいる人々に聞いての話なの) ~~図~~ か。
 (2) それとも、東北地方(奥羽地方)↑↑に住む人々の願つきについて述べたものなのだろうか。
 母真図版 224 多賀城碑 京(平城京)から一五〇〇里
 蝦夷国との境から一二〇里、常陸国(現茨城県)との境から四一二里、下野国(現栃木県)との境から二七四里。 靺鞨国(ハルビン) 肅慎の後身という ~~から~~ 三〇〇里
 とある。(既述)
 ・平城京から多賀城までの距離が一五〇〇里だ、というのだから、肅慎から日本列島北域の多賀城までの距離を三〇〇里と述べても、まとはがれではなさそうだ。(要検討)

144

コクヨ ケー20 20x20 180ミリ ÷ 10.25 = 17.56 Km 里=39375m
 (第6巻) 428 0.4 Km x 1500 = 600 Km